

心理検査による学生の心理特性把握の試み

川島 眞

A study of psychological traits of undergraduate students

KAWASHIMA Makoto

Abstract

The purpose of this study was to investigate the psychological traits of the undergraduate student group and to study the differences in characteristics of the undergraduate students between the departments and between the faculties. The questionnaire used was TEG II (Tokyo University Egogram New Version II) and the subjects were 224 undergraduate students.

As a result, a significant difference was found in both the mean value between the faculties, the departments in some egogram measure. In particular, students of Department of Information Expression showed egogram profile different from three other departments (Department of Policy Management, Department of Human Life Management, Department of Music Expression).

Key Word

psychological traits of the undergraduate students
egogram questionnaire
teaching method

[要約]

エゴグラム質問紙を利用して学部・学科という学生集団の心理的特性を把握し、学部間・学科間の集団特性の差異を検討した。質問紙にはTEG II (東大式エゴグラム)を使用し被験者数は224人である。

学生集団ごとのエゴグラム5尺度の平均値の差に関して、学部間・学科間ともいくつかの尺度で統計的に有意な差が見られた。特に情報表現学科の学生集団は他の3学科の集団とは異なるエゴグラム・プロフィールを示すことが見い出された。

[キーワード]

学生集団の心理的特徴 エゴグラム 教授法

1. はじめに

集団には各々その集団らしさがあり、「社風」や「校風」などと呼称されている。また、同じ組織内においても部署によって特色が異なることも、誰しもが経験的に納得できる現象である。

同様に大学という組織内でも学部や学科によって、あるいは学年によって、その学生集団が醸し出す雰囲気や特徴に違いがあることも日常的には頻繁に語られており、各種の集団の間で特徴の違いがあることはごく当然の事として受け入れられている。

しかし、そのように語られる差異は客観的なものではなく、関係者の間で曖昧に了解されているにすぎないものが大部分である。

本研究はこのような集団間の特徴の差異を客観的に把握しようとする試みであり、集団として学生集団である学部や学科を対象とした。

2. 目的

平成23年度現在、大学・短大進学率は53.9%（現役）と5割を超え、大学だけの進学率も47.7%と半数近くになっており（文科省、2011）、大学入学者の特質も近い過去と比較しても大きく異なっているのが現状である。各大学は偏差値という学力基準によっていくつかの層に区分されているが、進学率の上昇に伴い大学進学者の学力の底辺が下がるとともに、入学試験の多様化によってさまざまな特質（学力以外の能力や態度、性格も含む）を持つ学生が入学するようになった。

このようななかで、学生の質的变化に大学の教育、とりわけ教授法（教育手法）が追いついていない状況である。

客観的測定ツールによって学生集団の特色を理解することが出来るならば、上記のような悩みを抱える現在の大学教育の一助になると思われる。この点も本研究の目的としている。

3. 方法

心理学の授業「人間の心理（心理学）」の一環として授業時にTEG II（東大式エゴグラム）を実施した。平成22年度から平成23年度までに実施したTEG II回答をデータとして使用した（留学生を除く）。データ数は表1の通りである。

なお、慣例として研究論文では学科名等は抽象的に記述することが多いが、本研究は学内の教育とりわけ教授法の改善工夫に貢献するデータを提供することも目的としているので、あえて学部と学科を実名で扱うこととした。

表1 データ数内訳(人)

学部	学科	男	女	計
芸術情報学部	音楽表現学科	13	23	36
	情報表現学科	45	32	77
総合政策学部	総合政策学科	43	18	61
	ライフマネジメント学科	37	13	50
	計	138	86	224

今回のデータとして使用したTEG IIはエゴグラム質問紙形式の心理検査のひとつである。

そもそもエゴグラムは交流分析(Transactional Analysis)理論に基づき、自我状態を機能的に捉え直感的に視覚化する試みとしてデュセイ(Dusay, J. M.)によって考案された(デュセイ1980)。エゴグラムでは自我状態を5つの尺度(CP: Critical Parent, NP: Nurturing Parent, A: Adult, FC: Free Child, AC: Adapted Child)で捉える。これら5尺度は端的に言えばCP「厳しさ」、NP「優しさ」、A「冷静さ」、FC「自由奔放さ」、AC「従順さ」であるが、やや詳しく5尺度の特徴概要をまとめると表2のようになる。

表2 エゴグラム5尺度の特徴

尺度	長所	短所
CPが高い場合	目標が高い 理想を追求する 自分に厳しい 責任感が強い リーダーシップを発揮する	他人に厳しい 攻撃的 自分の言いは通す 自分の価値観を相手に押し付ける
NPが高い場合	人の気持ちがよくわかる(共感的) 人に優しく温かく接する 親しみやすい 世話をよくやく	干渉しすぎる おせっかいになる 過保護になる
Aが高い場合	事実に基づき物事を客観的、論理的に理解し判断する 情報を収集し、合理的に判断する	冷たい 人間味がない 計算高い
FCが高い場合	自分の感情を素直に表す 好奇心旺盛 積極的 創造性に富む	じっとしているのが嫌い 行動にブレーキをかけるのが苦手 自分勝手 がんこ
ACが高い場合	従順で素直 協調的	主体性に欠ける 他人の目や評価を気にする 劣等感を持ちやすい

(東京大学医学部心療内科 1999、末松弘行・野村忍・和田迪子 1993をもとに作成)

その後、エゴグラムは質問紙法化がなされ、日本では1974年に杉田が、1977年に岩井らがエゴグラム質問紙を開発し臨床場面で急速に普及した。

TEG(東大式エゴグラム)は東大心療内科において、厳密な統計的手法に基づき1984年に作成され、1993年、1999年の2回の改訂を経て、さらに2006年に再改訂されている(新版:本研究で使用)。現在TEGは医療現場で心身症などストレスを原因とする精神的疾患の病態把握や治療方針の決定、予後の推測のために用いられることが多いが、企業等産業界や教育の場で健常者の性格傾向や対人関係の改善指針として利用される機会も増加している。

このようにエゴグラム質問紙は主に各人の対人関係面での行動傾向を測定することをねらった心理検査であり、周囲に与える印象の源をとらえることができると考えられる。この点からエゴグラム質問紙は今回の研究目的に適したものであると判断した。

本研究では個人の行動傾向の総和が集団としての特徴を表すと仮定し、エゴグラム質問紙の5尺度の平均値比較をすることで、学部間や学科間の特徴差異を探ることとした。

4. 結果と考察

今回は各学科、性別ごとのデータ数が小規模であり、パイロット・スタディ的な研究と位置づけているため、データの分析は男女混合とし、学部ごと学科ごとに平均値、標準偏差を求め、それらをもとに学部や学科の間にエゴグラム上の差違が認められるかを検討した。

1) 学部間の比較

学部ごとに求めたTEG IIの5尺度に関する基本統計量は表3の通りであり、それらをグラフで示したものが図1になる。各尺度は20点満点である。

図1で明らかなように2つの学部のエゴグラム・プロフィールは異なっており、所属する学生の心理特性に違いがあることがうかがわれる。特にCP、NP、FCの3尺度で学部間に大きな差が見られる(CP、NP、FCともに総合政策学部が高い)。

表3 尺度ごと平均値、標準偏差(学部)

芸術情報学部(113名)	CP	NP	A	FC	AC
平均値	10.57	12.43	11.23	10.71	13.42
標準偏差	4.31	4.37	4.69	4.92	5.37
総合政策学部(111名)	CP	NP	A	FC	AC
平均値	11.87	14.21	10.80	12.71	12.65
標準偏差	3.67	3.92	4.20	4.38	5.10

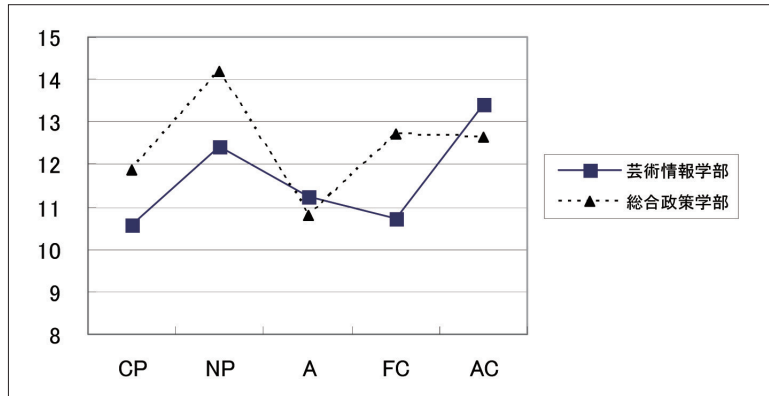


図1 エゴグラム平均値プロフィール(学部比較)

次にこの差が統計的に有意なものであるのか否かについて検定を行った(t検定)。検定結果は表4のとおりである。

表4 学部間の差異の検定結果

学部	統計量	CP*	NP**	A	FC**	AC
芸術情報学部 (113人)	平均値	10.57	12.43	11.23	10.71	13.42
	標準偏差	4.31	4.37	4.69	4.92	5.37
総合政策学部 (111人)	平均値	11.87	14.21	10.80	12.71	12.65
	標準偏差	3.67	3.92	4.20	4.38	5.10

**p<.01 p*<.05

両学部間にCP、NP、FCともに有意な差があることが確かめられた。特にNPは0.01水準での棄却率であり、非常に大きな差が存在すると言える。

この結果をもとに各学部の学生の心理特性を描くとするならば次のようになる。

総合政策学部の学生：わがままなところはあるが積極的であり、他者への優しさを持ちあわせ、なおかつ厳しさもある。

芸術情報学部の学生：おとなしく控え目で他者には厳しくも優しくもなく、干渉しないようにしている。

2) 学科間の差

1)では学部間でエゴグラム尺度に差があることがわかったが、同じ学部内の学科でも学生のエゴグラム特徴に差があるのか、また、4つある学科のエゴグラム特徴にどのような差異特徴があるのかについて次に検討した。比較方法は学部間比較と同様である。

4学科各々の基本統計量は表5であり、それをグラフ化したものが図2である。

表5 尺度ごと平均値、標準偏差(学科)

音楽表現学科(36名)	CP	NP	A	FC	AC
平均値	12.47	13.61	11.22	11.78	13.50
標準偏差	3.44	3.91	4.61	4.32	4.93
情報表現学科(77名)	CP	NP	A	FC	AC
平均値	9.68	11.88	11.23	10.21	13.38
標準偏差	4.40	4.49	4.75	5.12	5.60
総合政策学科(61名)	CP	NP	A	FC	AC
平均値	11.84	14.30	10.80	13.05	13.28
標準偏差	3.74	3.76	3.62	4.19	5.19
ライフマネジメント学科(50名)	CP	NP	A	FC	AC
平均値	11.92	14.10	10.80	12.30	11.88
標準偏差	3.61	4.15	4.85	4.61	4.93

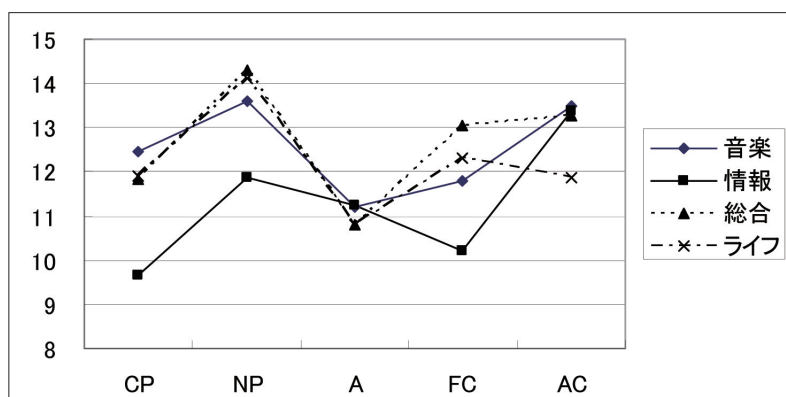


図2 学科ごとのエゴグラム平均値プロフィール

図2から、音楽表現学科と総合政策学科、ライフマネジメント学科3学科のエゴグラム・プロフィールが似ていることがわかる(ただし、FC - ACラインに多少の違いはある)。

それに比べて情報表現学科のエゴグラム・プロフィールはA尺度とAC尺度以外は大きく他の3学科とは異なっており、エゴグラム・プロフィール上は本学の中では異質な集団と言っても過言ではないであろう。

この情報表現学科の異質性を中心として、全4学科のエゴグラム尺度平均値の差について統計的な検討を加えた(学部間比較と同様に学科間の各尺度の平均値の差の検定を行った)。

①同学部内の学科の差について

各学部内の2学科について差の比較を行ったところ、音楽表現学科と情報表現学科の間で

はCPとNPに有意な差が見られた(表6)。特にCPの差は有意水準.001であり、情報表現学科の学生のCPの低さが顕著である。

先ほど学部間比較で触れた芸術情報学部の特徴である「他者に厳しくも優しくもなく干渉しない」傾向は情報表現学科に起因するようである。

表6 音楽表現学科－情報表現学科

学科	統計量	CP***	NP*	A	FC	AC
音楽表現学科 (36人)	平均値	12.47	13.61	11.22	11.78	13.50
	標準偏差	3.44	3.91	4.61	4.32	4.93
情報表現学科 (77人)	平均値	9.68	11.88	11.23	10.21	13.38
	標準偏差	4.40	4.49	4.75	5.12	5.60

***p<.001 **p<.01 p*<.05

総合政策学部内の2学科(総合政策学科、ライフマネジメント学科)については、すべての尺度において有意な差は見られなかった。図2のエゴグラム・プロフィール通り、これら2学科はかなり似た行動特性を示す学生で構成されていると思われる。

②他学部同士の学科差について

異なる学部同士の学科間の差についての検定結果では、情報表現学科－総合政策学科間と情報表現学科－ライフマネジメント学科間に有意な差が見られた。

まず、情報表現学科－総合政策学科間では表7のようにCP、NP、FCで有意な差(3尺度とも総合政策学科が高い)が見られた。

表7 情報表現学科－総合政策学科

学科	統計量	CP**	NP**	A	FC**	AC
情報表現学科 (77人)	平均値	9.68	11.88	11.23	10.21	13.38
	標準偏差	4.40	4.49	4.75	5.12	5.60
総合政策学科 (61人)	平均値	11.84	14.30	10.80	13.05	13.28
	標準偏差	3.74	3.76	3.62	4.19	5.19

**p<.01 p*<.05

また、情報表現学科－ライフマネジメント学科間でも同様にCP、NP、FCでライフマネジメント学科が有意に平均値が高いという検定結果となった(表8)。

表8 情報表現学科－ライフマネジメント学科

学科	統計量	CP**	NP**	A	FC*	AC
情報表現学科 (77人)	平均値	9.68	11.88	11.23	10.21	13.38
	標準偏差	4.40	4.49	4.75	5.12	5.60
		∧	∧	∨	∧	∨
ライフマネジメント学科 (50人)	平均値	11.92	14.10	10.80	12.30	11.88
	標準偏差	3.61	4.15	4.85	4.61	4.93

**p<.01 p*<.05

上記結果から、本学4学科の学生をエゴグラム質問紙(TEG II)で測定される心理特性で分けると「音楽表現学科、総合政策学科、ライフマネジメント学科」と「情報表現学科」の2群に大別できそうである。

2つの学部間で有意な差が見られたことは、音楽表現学科のデータ数が情報表現学科より少ないことも手伝い、情報表現学科の特徴が学部特徴として反映されたものであると推測される。

総合政策学部の2学科間には有意な差がなく、ほぼ同質な2つの学生集団から成る学部と言えるが、芸術情報学部は集団特徴を異にする2つの集団(学科)が同居している学部と表現できそうである。

学生の友人関係形成契機は単純ではないので、今回の結果だけから断言することはできないが、芸術情報学部における2学科間の学生交流は、総合政策学部のそれに比べて少ないことが予想される。なぜならば、総合政策学部の学生に比べて芸術情報学部の学生は2学科ともFCが低いので、好奇心を持って積極的に関わるといふ行動が少ないと思われるからである。さらに、情報表現学科の学生はCP、NPも低いと、良くも悪くも人への関心が低いうえにお節介もやかない傾向にあるからである。ただし、音楽表現学科の学生はCP、NPが比較的高いので音楽表現学科の学生からの働きかけはそこそこあるかもしれない。

以上のように、本研究ではエゴグラム質問紙という心理検査によって、学生集団の特徴の差異を心理特性レベルで測定することができたと言ってよいと思われる。また、測定された学部、学科という学生集団の特徴は、経験的、直感的に我々が感じているものに類似したものであった。

もちろん、本研究は既述したように、データ数や学科ごとのデータ男女比等の点で厳密さが不足しているため、特性把握と差異の測定の可能性が示唆されたとの表現に留めておかなばならないであろう。

5. 展望

本研究の今後の課題としては、まず第一にエゴグラムデータを増やすと同時に性差も検討する必要があると思われる。また、学科を構成する学生の男女比に応じたデータ構造での分析も不可欠である。

本研究で用いた学生集団の特性と集団差異の把握方法の有効性が示唆されたので、今後上記のようにデータを増やして厳密な分析を行った次の目的は「研究結果の本学における教育への活用」になる。

クロンバック (Cronbach, L. J.) により提唱されスノウ (Snow, R. E.) らによって理論化された適性処遇交互作用 (ATI : Aptitude Treatment Interaction) という教授法に関する考え方がある。学習者の性格など個人的特性と学習法や教授法との交互作用について言及したものであり、学習目標に到達させるために学習者個人の特性に応じて教授法 (学習指導法) を変える必要性が説かれている。

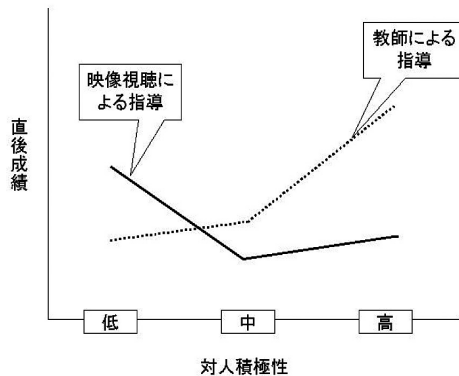


図3 スノウらの実験結果 (川島, 2004より転載)

例えば、スノウらが生徒の特性変数として「対人積極性」を用いて対人積極性の高低と「教師とのやり取りがある対面授業」と「映像視聴による学習」という2種類の教授法との関係を調べたところ、対人積極性が高い生徒は対面授業が効果的 (成績が上がる) であり、対人積極性が低い子どもは映像視聴学習のほうが効果があることを見出した (図3)。

この適性処遇交互作用は教育心理学において学習者特性に応じた教授法の理論的基礎となるものであり、学習者特性に合った教育効果を最適化することを目指すものである。

このような考え方は主に義務教育諸学校における教育場面で議論されているが、大学のような高等教育機関における教育にも導入する必要性が高まってきているのではないだろうか。また、取り入れる価値があるのではないかと思われる。

例えば、大学における音楽実技指導は個人レッスン形式で行われているが、個人レッスンでは学生の性格に応じてさまざまな指導法がとられている (例えば、褒められて意欲を出す

タイプか叱られて意欲を出すタイプかによって厳しさを変えてレッスンをする)。このような指導法はまさに適性処遇交互作用に沿ったものであり、大学においても意図せず一部ですでに導入されていると言える。

この個人レッスンは学生個人の实技能力を目標レベルまで向上させるためのものであり、特に音楽を専門とする学科等では教育の根幹をなすものであるため、指導者もごく自然にこのような指導法を採っているのであろう。

かつての大学は一部のエリート集団を対象とした、まさに「高等教育機関」であったので、学生の能力を向上させるための工夫や努力が大学側には求められなかったのであるが、人口動態や社会状況が大きく変化した現在は「大衆教育」と言っても過言ではなく、入学した学生を社会に送り出すまでに相当の能力向上をはかることが責務となっている。

このような使命を持つ大学教育では、かつての大教室でのマスプロ授業は減少し、少人数教育の割合が増大しつつある。しかし、もはや人数を少なくするだけでは十分な教育効果が得られなくなっている場合も多いと思われ、学生の特性に応じた教授法の導入が喫緊の課題となってきているのではないだろうか。

本研究結果をスノウらの研究結果に当てはめて考えるならば、総合政策学部2学科の学生（音楽表現学科も一応こちらに含む）の方が対人積極性が高い集団であるので、教員が学生との相互コミュニケーションを多用した授業展開がふさわしく、情報表現学科の学生には一斉授業形態の情報伝達型の授業の方が効果的であると言える。ただし、対人積極性を高めるために敢えて双方向コミュニケーション型の授業を行うという選択肢もあり、大学教育の場合は適性処遇交互作用理論を単純には当てはめられないであろう。

しかし、学生個々の特性を考慮した教授法までは無理でも、少なくとも学生集団の特性を把握した上で最も適した教授法を採用していくという姿勢は、現在とこれからの大学には不可欠となっていくのではないだろうか。

引用文献

- [1] ジョン・M・デュセイ（池見西次郎 監修／新里里春 訳） 1980 『エゴグラム ひと目でわかる性格の自己診断』 創元社
- [2] 川島眞 2004 『教育心理学ワーキングテキスト』 世音社
- [3] 文部科学省 2011 『平成23年度学校基本調査』
- [4] 末松弘行・野村忍・和田迪子 1993 『TEG<東大式エゴグラム>第2版手引』 金子書房
- [5] 東京大学医学部心療内科（編著） 1999 『新版TEGエゴグラム・パターン—TEG（東大式エゴグラム）第2版による性格分析』 金子書房

参考文献

- [1] 桂戴作 1986 『自分発見テストーエゴグラム診断法』 講談社
- [2] 川島眞 1997 エゴグラムにみる短期大学学生の特徴(5)ーエゴグラム・タイプによる考察ー 日本心理学会第60回大会発表論文集p379
- [3] 川島眞 2003 教育実習に求められる心理特性に関する研究ーエゴグラムを使った試みー日本心理学会第66回大会発表論文集p1132
- [4] 新里里春・水野正憲・桂戴作・杉田峰康 1986 『交流分析とエゴグラム』 チーム医療
- [5] 新里里春 1993 『交流分析療法ーエゴグラムを中心に』 チーム医療